

実践報告「英語での発話」を促すために

キーワード： コミュニケーション活動/協同学習/英語での発話

堀内 ちとせ

1. はじめに

英語自体はあまり好きでなくても、「英語で会話する」ことに興味がある学生は意外に多い。リオデジャネイロオリンピックも閉会し、いよいよ、東京オリンピック開催まで4年を切った今、日本人が「英語を使える」ようになることが、ますます叫ばれている。

実際のところ、日常的に全く英語を使わなくても生活できてしまう日本で、「英語での発話」を促すのはかなり難しい。受験英語の知識こそ多少残っていたとしても、英語を使う機会が全くない学生たちにとっては、「英語の授業」こそ「英語を使う」ことのできる唯一の場と言っても良いのではないか。

今回の試みでは、小さな働きかけではあるが、授業内に使えそうな英語表現を文字情報の形で学生に与え、授業中にできる限りその表現を音声情報としても与えることにより、学生たちがその表現(だけではあるが)を授業内の活動の中で自ら使うことができるように促してみた。また、「意味」と「英語の音声」を結び付けるような練習を授業の中で何度となく行うことにより、学生たちが言いたい内容を少しでも英語を使って表現できるような方向に向かわせようとした。

医療系大学の検査系のクラス、2016年度、前期、1学年、64名の「授業」の取り組みを中心に、同じく検査系クラス、2015年度、前期、1学年、50名の学生への「アンケート調査」をも併せて検討する。

2. 「学生たちの現状」について

2.0 「アンケート」について

今回、対象とした医療系大学、検査系の学生64名(2016年度・前期・1学年)に対して、初回の授業(4月)で、英語についての簡単なアンケート調査を行った。アンケートの尺度は、安永(2012: 125)に倣って「1・2・3・4・5」の5段階とし、「1」は「全くそう思わない」、「5」は「とてもそう思う」とした。

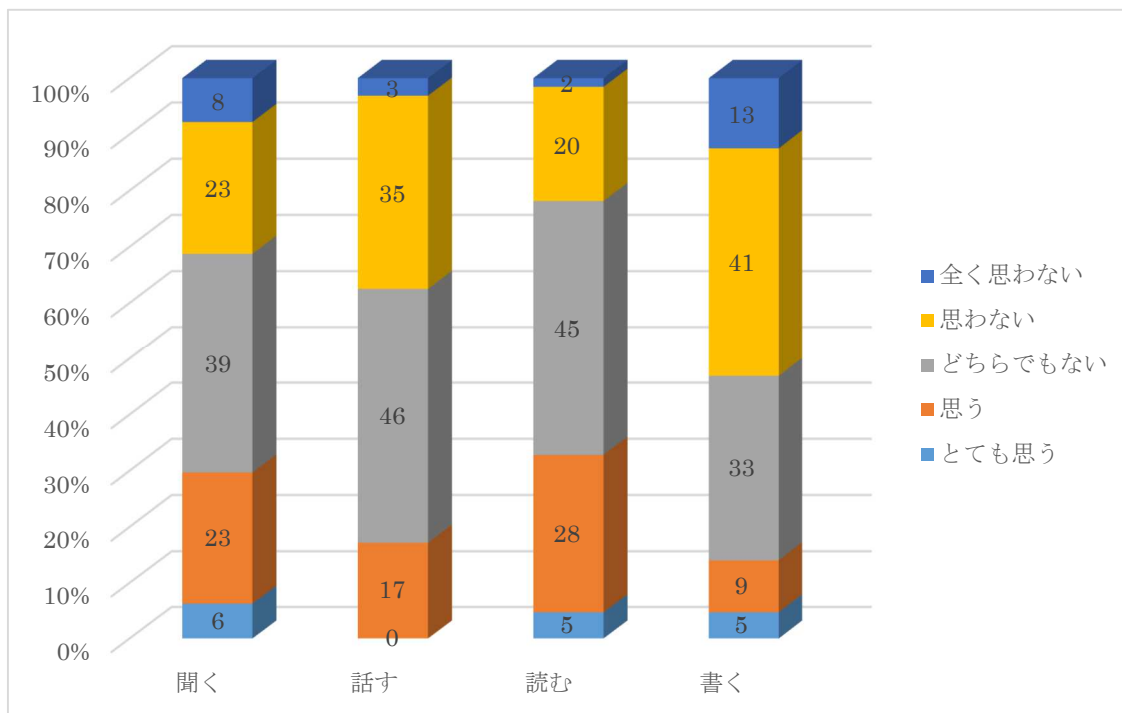
「英語」について、5段階で調査したアンケートの内容は、「英語が好きですか?」、「英語は必要だと思いますか?」、「英語ができるようになりたいですか?」、「英語活動していますか?」といった4つの問いに対して、それぞれ、「聞く」・「読む」・「書く」・「話す」の4項目について調査した。

「英語活動していますか?」については、上記の5段階の選択肢を少し変形させ、「1」は「皆無」、

「2」は「週1・2日」、「3」は「週3日」、「4」は「週4日」、「5」は「週5日以上」とした。

2.1 「英語が好きですか？」について

図1 「英語が好きですか？」



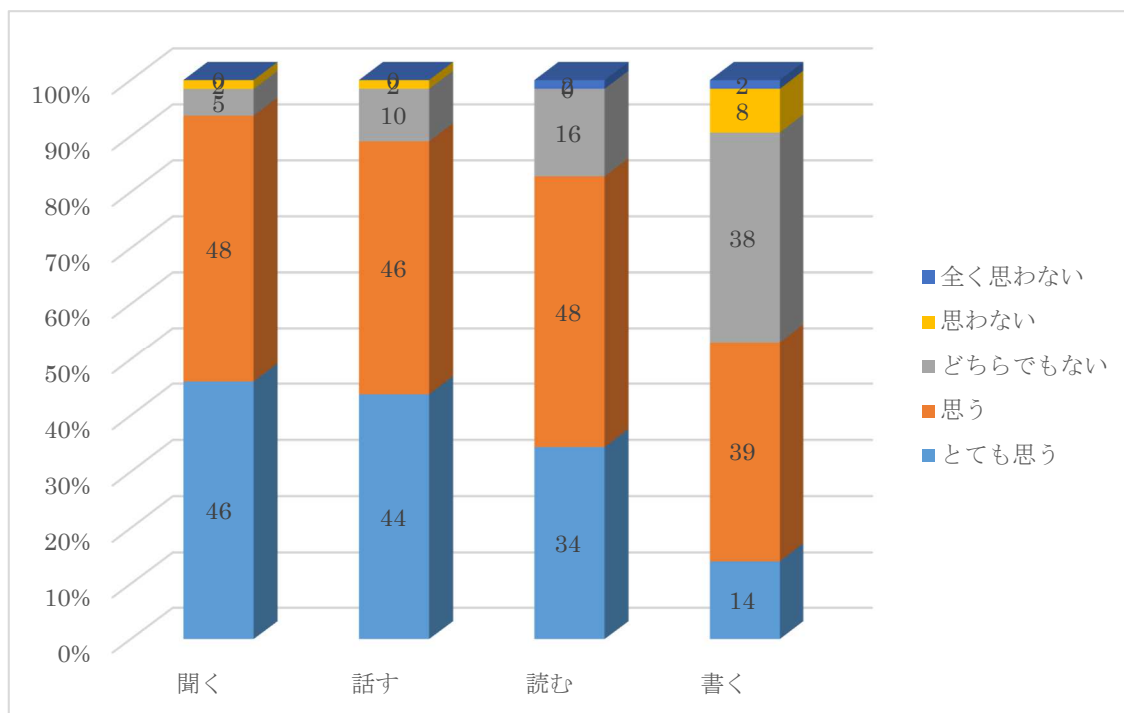
Note. 「英語が好きですか？」という問いに対する、(左側より順に)「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の4項目における調査結果。縦軸は、それぞれの項目において、下より、「とても思う」・「思う」・「どちらでもない」・「思わない」・「全く思わない」と答えた学生の割合(縦軸:パーセント)を示す。

図1を見ると、4項目の全てにおいて、過半数以下の学生たちしか、「英語が好き」と答えていないことがわかる(聞く:6%+23%=29%、話す:0%+17%=17%、読む:5%+28%=33%、書く:5%+9%=14%)。他と比べて数値的には高めである、「聞く」、「読む」の項目であっても、3分の1程の学生が「好き」と答えているに過ぎない(それぞれ、6%+23%=29%、5%+28%=33%)。

この2項目について「英語が好き」と答えている割合が高いのは、中学や高校の授業で、「読む」・「聞く」といった活動が中心であり、比較的なじみやすかったからなのかもしれない。

2.2 「英語が必要だと思いますか？」について

図2 「英語が必要だと思いますか？」



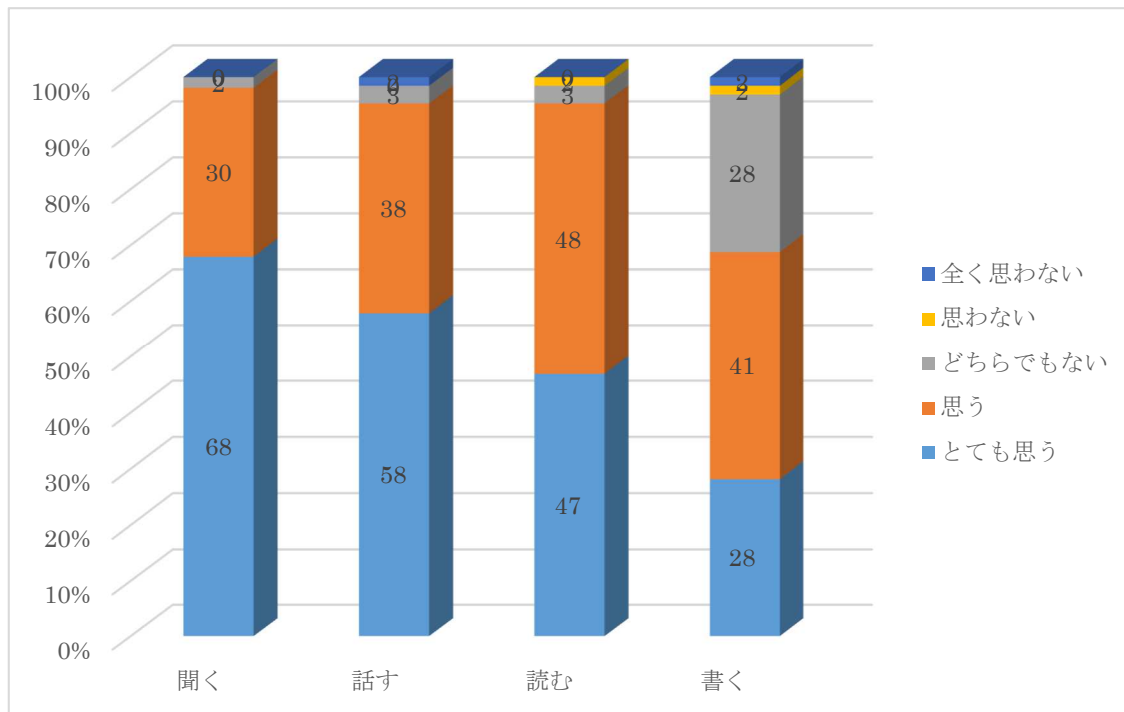
Note. 「英語が必要だと思いますか？」という問いに対する、(左側より順に)「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の4項目における調査結果。縦軸は、それぞれの項目において、下より、「とても思う」・「思う」・「どちらでもない」・「思わない」・「全く思わない」と答えた学生の割合(縦軸:パーセント)を示す。

図2によれば、「英語が好き」であるかどうかの場合と違って、どの項目においても、比較的多くの学生が英語に対する「必要性」を感じているということが分かる(聞く:46%+48%=94%、話す:44%+46%=90%、読む:34%+48%=82%、書く:14%+39%=53%)。中でも、英語で会話する上で必要な能力とも言える、英語を「聞く」、「話す」の項目においては、「必要性」を感じている学生の割合が90%以上である(聞く:46%+48%=94%、話す:44%+46%=90%)。また、最も「必要」だと答える学生の割合が少ない「書く」の項目であっても、過半数を超える学生が「必要」だと答えている(14%+39%=53%)。

「必要性」を感じているにもかかわらず、「英語が好き」だと答える学生の割合が全体的に低めであるのには、受験期に受験英語を強制されたことも影響しているのかもしれない。

2.3 「英語ができるようになりたいですか？」について

図3 「英語ができるようになりたいですか？」



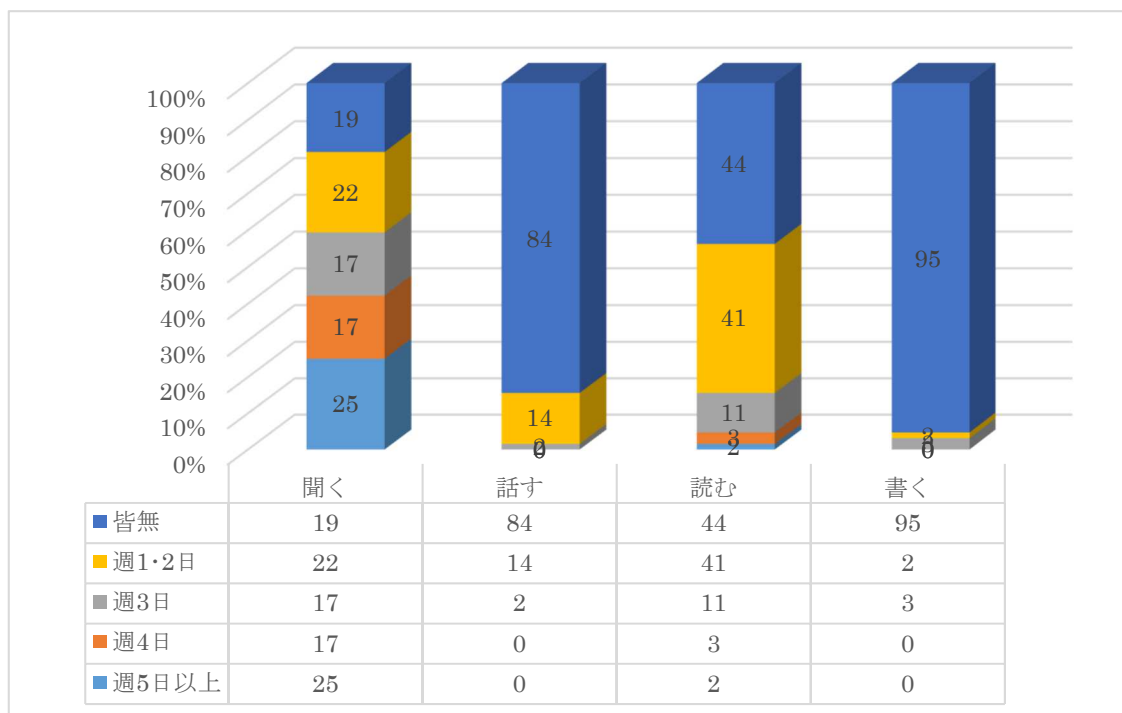
Note. 「英語ができるようになりたいですか？」という問いに対する(左側より順に)「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の4項目における調査結果。縦軸は、それぞれの項目において、下より、「とても思う」・「思う」・「どちらでもない」・「思わない」・「全く思わない」と答えた学生の割合(縦軸:パーセント)を示す。

図3を見ると、全体的に「英語ができるようになりたい」と考えている学生の割合が高く、しかも、「必要性」を感じている学生(2.2参照)よりもさらに高い割合を示していることが分かる(聞く:46%+48%=94% vs. 68%+30%=98%、話す:44%+46%=90% vs. 58%+38%=96%、読む:34%+48%=82% vs. 47%+48%=95%、書く:14%+39%=53% vs. 28%+41%=69%)。

中でも、「聞く」、「話す」の項目では「英語ができるようになりたい」と答えている学生の割合が95%を超えている(聞く:68%+30%=98%、話す:58%+38%=96%)ことから、学生たちは、対面して英語でコミュニケーションを取ることに大きな興味を抱いていると言って良いのではないだろうか。

2.4 「英語活動していますか？」について

図4 「英語活動していますか？」について



Note. 「英語活動していますか？」という問いに対する、(左側より順に)「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の4項目における調査結果。縦軸は、それぞれの項目において、下より「週5日以上」・「週4日」・「週3日」・「週1・2日」・「皆無」と答えた学生の割合(縦軸:パーセント)を示す。

図4によれば、「聞く」以外の項目では、「皆無」、あるいは「週1・2回」と答える学生の割合が80%を超えていることが分かる(話す:84%+14%=98%、読む:44%+41%=85%、書く:95%+2%=97%)。

この実体のままでは、学生たちが感じている、英語に対する「必要性」や「願望」に見合うだけの英語力を向上させられる可能性はかなり低いと言わざるを得ない。中でも、「話す」の項目においては、学生たちが英語を話す必要性を感じ(2.2 参照)、英語が話せるようになりたいと考えている(2.3 参照)中で、英語を週3日、「話している」学生の割合が2%であるという事実を目を背けることはできないのではないかと。

この現実を打破するためにも、たとえ「英語の授業」の中だけであっても、少しずつであれ、「英語を使う」機会を増やしていったべきであることは明らかであろう。

3. 「今回の試み」について

授業は、学生の授業への参加を少しでも促すために、「協同学習(小グループで互いに助け合いながら学習を進めていくグループ学習の1つ)」の考え方にに基づき、3人、あるいは4人の小グループを中心に展開させている。今回の試みでは、学生たちの授業内における英語での発話が少しでも増えるようにと、「授業の流れ」を示す「マニュアル」(後述のうちわちゃんマニュアル)の中で、授業内に使えそうな「英語での言い回し」の表現も一緒に示してみることにした。

協同学習のハンドブックには、「互恵的な関係を生み出す工夫」として、「学習資源(道具や教材)の共有による協力」が挙げられている。授業の流れを示す「マニュアル」は、各自に配布するのではなく、グループに1つのみ配布する。授業は、毎時間、ほぼ同じ流れで進めていくため、毎回、グループに1つずつ同じマニュアルを配布することにする。初回の授業時に、グループのメンバーでマニュアルと一緒に熟読させ、「授業の流れ」を概ね認識させる。2回目以降の授業では、学生たちは、必要に応じてマニュアルを確認しながら、授業を進めていく。

グループでの活動をスムーズにするために、グループには「まとめ役」を1人置く。各グループの「まとめ役」の学生は、主に教員とのコミュニケーションの手段としての「うちわ」を持って活動する。グループ内での活動は、「うちわ」を持った「まとめ役(通称「うちわちゃん」)」が進めて行くため、「授業の流れ」を示したマニュアルは、「うちわちゃんマニュアル(資料3・4参照)」と命名した。

「うちわちゃんマニュアル」には、授業の流れに沿って、その都度、使えそうな「英語での言い回し」表現の数々が載せてある。「英語での言い回し」表現は、マニュアルで示されているだけだと、学生たちが自らマニュアルを確認しない限り、活用されないままとなってしまう可能性がある。そこで、使うべき時に使うべき表現を教員がまず使っているところを学生に示し、その際、耳に残るように何度も繰り返し声に出して聞かせることにより、学生自身の口からも思わず「言い回し」が出てくるように仕向ける。

「英語での言い回し」表現とは、例えば、授業開始時の「体調確認」での“How are you?”や、グループのメンバーの調子や様子を確認する際の“Is everything OK?”や“How was it?”等の比較的短めで簡単な表現のことである。

「英語で発話」できるようになるためには、英語を聞く場合と同様に、「意味」と「つづり」ではなく、「意味」と「音声」とが結びつけられている必要がある。そのため、使用テキストの文章にでてくる単語の「意味」を視覚情報として与え(資料1参照)、付属のCDを流しながら、その「意味」に対する英語が流れた瞬間にCDを停止させ、それと同時に、その「意味」に対する英単語を「つぶやく」ように指示する。また、つぶやかせた瞬間に、その単語の「つづり」を文字情報として見せる。文字で確認させることにより、学生たちの記憶をより確かなものにするためである。

例えば、資料1のような資料をWORDで作成し、各単語の最初のつづり字のみが見える状態で提示しながらCDを流す。CDから“analysis”の音声の流れた途端にCDを停止させ、学生たちには聞こえた「分析」に対応する英単語を「つぶやく」ように指示する。学生たちが“analysis”とつぶやいた瞬間に、WORDを操作して“analysis”の文字情報を見える状態にして見せる(資料2参照)。

このように、それぞれの単語ごとに、「意味」と「英語の音声」とを少しずつでも結びつけられるような活動を数多く行うことにより、実際に自ら言いたいことが出てきた場合も英語で表現しやすくなるのではないかと考えた。

「英語で発話」するためには、英語の瞬発力も必要である。自分が表現したい内容を瞬時に英単語で表し、チーム内で回しながら英語の瞬発力を鍛える、「連想ゲーム(堀内 2013)」も行った。

また、授業外の活動としては、今回も「実体験レポート(堀内 2013)」を取り組ませた。学生たちの「英語口」の筋肉が少しずつでも鍛えられるように、授業内はもちろん、授業外の「英語活動」においても、聞こえた英語は、ことごとく自主的に「つぶやく」努力をするように声かけも続けた。

最後に、「英語を口にする」ことができるためには、心の安定も必要である。「英語を口にする」ことに対する不安を少しでも取り除けるように、教員がネイティブの先生と英語で会話した折りの失敗談等を折りに触れ語った。日本人なのだから「間違っても大丈夫！」ということ、ひたすら伝え続けた。

4. 結果と考察

4.0 「アンケート」について

最後の授業時に、対象学生全員にアンケート調査を行った。アンケートの尺度は、安永(2012:125)に倣って「1・2・3・4・5」の5段階とし、「1」は「全くそう思わない」、「5」は「とてもそう思う」とした。また、可能な場合にはコメント等も記述させた。

「英語での発話」について、5段階で調査したのは、「授業内に英語を使う機会が増えてきた」かどうかという1項目についてである。2015年度、前期の学生たち(1学年)に対しても、授業の最終時に同じ質問項目で調査したデータがあったため、今回の2016年度、前期の学生たち(1学年)の試み後の結果と比較してみることにする。

前回の試みでは、「英語での発話」にはこだわらず、グループ内での交流を活発にすることを目指して、「ちゃぶ台」の導入を試みた(堀内 2015)。日本語であったとしても、まずグループ内での発話量を増やすことが「英語での発話」を増やすことにもつながると考えたためである。ただ、最終的に目指しているのは、学生たちが少しでも「英語で発話できる」ようになることであり、それが今回の試みへとつながっている。

前回の試みでは、グループ内での交流をお互いの顔を見ながら行えるように物理的環境を整えることに主眼を置いていた。そのため、授業の中で今回ほど積極的に「英語で発話する」ことを呼びかけられなかった節がある。一方、今回は、授業では事あるごとに教員自身も学生たちが使えるような英語表現を使っているところを積極的に示しながら、かつ、英語での瞬発力を高めていけるような活動を行った。今回の試み後のアンケート調査では、前回の試みと比べ「英語を使う機会が増えた」という結果となっていることに期待したい。

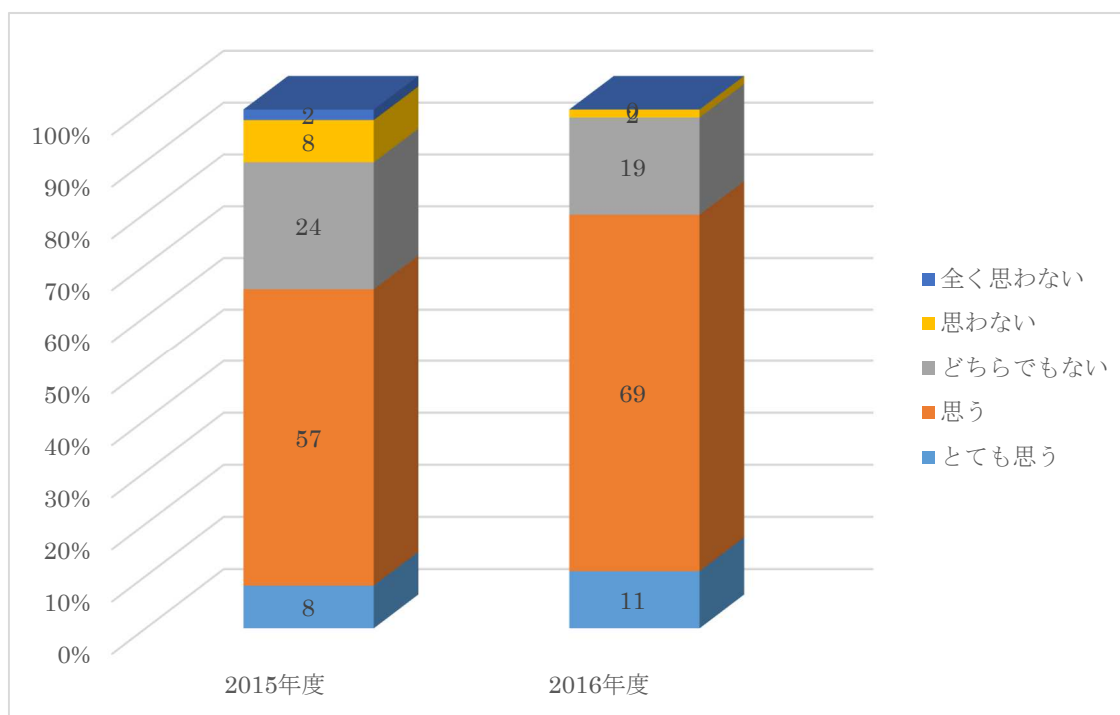
また、今回は、今回の試みの対象学生の英語にまつわる「現状」を知るためのアンケート(2. 参照)と同じアンケート調査を、授業終了時の7月にも行ってみた。今回は、授業内の学生たちの「英語での発話」を少しでも増やすことを目指しての「取り組み」だったこともあり、「英語を話している(話す機会がある)」と答える学生の割合が7月の調査の段階では増えていることを期待したい。

一般的に、「好き」である行為は実行しやすいものである。そこで、7月の調査では、「英語が好き」と答える学生の割合が少しでも増加していることを望みつつ、「英語を話す」ことが「好き」と答える学生の割合の推移にも目を向けてみたい。

4.1 授業内での「英語を使う機会」について

「授業内に英語を使う機会が増えてきた」かどうかという1項目について、2015年度、前期、1学年の学生、50名と、2016年度、前期、同じく1学年、64名の調査結果を比べてみることにする。

図5 「授業内に英語を使う機会が増えてきた」(2015年度 vs. 2016年度)



Note. 「授業内に英語を使う機会が増えてきた」という項目に対する、2015年度(左側)と2016年度(右側)の調査結果。縦軸は、下より「とても思う」・「思う」・「どちらでもない」・「思わない」・「全く思わない」と答えた学生の割合を示す(縦軸:パーセント)。

図5において、2016年度における「とても思う」・「思う」と答えている学生の割合を見てみると、2015年度の割合よりも増えていることが分かる(それぞれ、 $11\% + 69\% = 80\%$ 、 $8\% + 57\% =$

65%)。2015年度と2016年度の平均値の差を優位水準5%の両側検定により検討してみたところ、有意差が見られた($t(112) = -2.37, p < .05$)。

学生からのコメントを見てみると、「はずかしい」、「日本語の方が簡単だから日本語で言う」等のマイナス的なコメントもわずかに見られる一方で、「(英語の)フレーズを言うのは良いと思う」、「(英語を使うことに)抵抗がなくなってきた」等の前向きなものも数多く見られた。

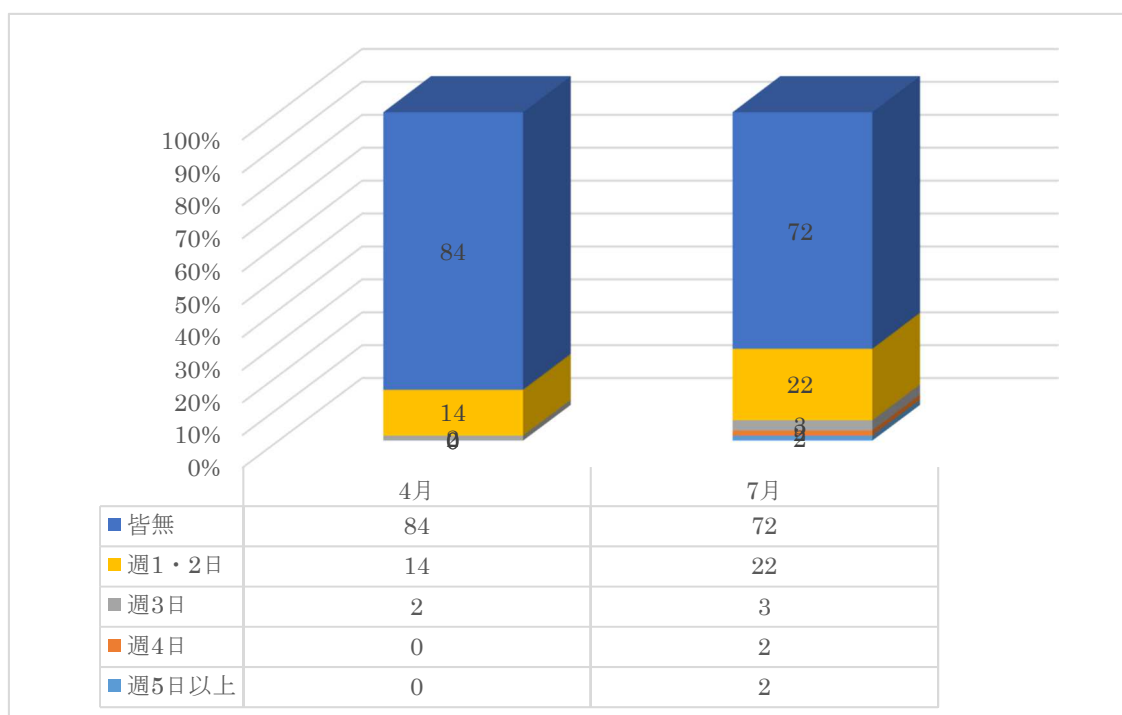
また、授業内に行った活動の影響を受けてか、「しゃべる機会は増えたと思う」、「新たな単語がパッと出てくるようになることが良かった」、「(英語を話すことに)抵抗がなくなってきた」といったコメントも見られる中で、「少しでも話そうという意識が英語の上達につながると思った」、「普段そんなに英語とかかわらないけど、(自分の)意識で変われると思った」といったコメントも見られた。学生自身の「気の持ち方」で、結果も大きく変わってくるようである。

「使えるようになると楽しかった」、「だんだん楽しくなります」とコメントする学生も見られた。英語を口にする機会が増えれば、学生たちの「英語口」の筋肉も少しずつ培われ、それが「喜び」にもつながってきている学生も存在していたということである。

4.2 「英語活動をしていますか？」について

「英語活動していますか？」という問いに対して、「話す」項目について4月の段階の調査結果と7月の段階のものを比べてみた。

図6 「英語活動していますか(話す)」(4月 vs.7月)



Note. 「英語活動していますか？」という問いに対する、「話す」項目における、4月(左側)と7月(右側)における調査結果。縦軸は、下より「週5日以上」・「週4日」・「週3日」・「週1・2日」・「皆無」と答えた学生の割合を示す(縦軸:パーセント)。

図6において、4月の段階でも、7月の段階でも、「話す」項目について「週5日以上」、「週4日」、および「週3日」と答えている学生の割合が、かなり低いことが分かる。一方で、「皆無」と答える学生の割合が減り、「週1・2日」と答える学生がわずかながら増加している。「英語活動していますか？」という問いに対して、「話す」項目についての4月と7月の「平均値の差を優位水準5%の両側検定により検討してみたところ、有意差が見られた($t(63) = -2.12, p < .05$)。

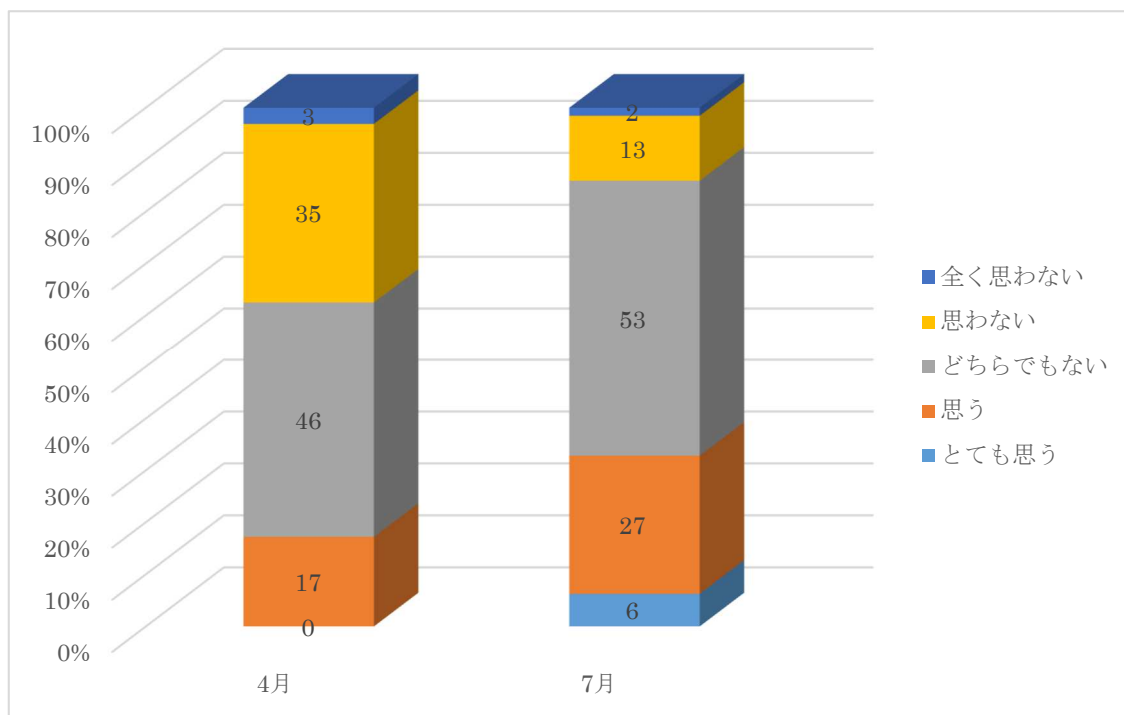
コメントを見てみると、4月の段階では、「あいさつ程度」といったコメントが2件見られるだけであったのに対して、7月の段階では、「外人さんがいたら話しかける」といったコメント(1件)と、「塾で英語を教えている」といったコメント(2件)が見られた。

わずかな変化でしかないかもしれないが、何事も小さなことの積み重ねである。時間はかかるかもしれないが、授業の中での「英語を使う」経験を増やしてやってやるのが、大きな変化にもつながるのではないか。

4.3 「英語を話すことが好き」かどうかについて

最後に、「英語が好きですか?」という問いに対して、「話す」項目について4月の調査結果と7月のものを比べてみることにする。

図7 「英語が好きですか(話す)」(4月 vs.7月)



Note. 「英語が好きですか?」という問いに対する、「話す」項目における、4月(左側)と7月(右側)の調査結果。縦軸は、それぞれの調査結果における、「とても思う」・「思う」・「どちらでもない」・「思わない」・「全く思わない」と答えた学生の割合を示す(縦軸:パーセント)。

図7において分かるのは、「話す」項目について、「英語が好き」だと答えている学生の割合が、4月と比べて、7月の段階でわずかではあるが増加しているということである。4月と7月の「平均値の差を優位水準5%の両側検定により検討してみると、有意差が見られた($t(63) = -3.18, p < .05$)。

「だんだん楽しくなります」とコメントしている学生も見られたが、「英語を話すのが好き(≒楽しい)」になり、日常的に少しずつでも英語で発話する機会を増やしていったら、学生たちの「英語が使える!」日も近づくのかもしれない。そのためにも、授業の中では、教師自身が「楽しんで」英語を使う場面を多く示してやるのが大切であるのかもしれない。

5. おわりに

最近、日本人の「英語を使える(≒話せる)」能力の向上が声高に叫ばれるようになったきっかけとえば、2020年の東京オリンピックであるのかもしれない。ただ、長年、授業の中で学生たちを見ていると、それよりずっと以前より、「英語で会話する」ことには興味がある学生が多く存在していた感がある。

今回は、具体的にどれくらいの割合で「英語を話す」ことに興味を示す学生が存在するのかを調べてみた。その結果、予想していたとおり、英語をもっと「聞ける」ようになりたい、「話せる」ようになりたい、つまり、英語を聞いたり、話したりすることに興味がある学生が多数存在していることが明らかになった(2. 参照)。一方、英語を聞いたり、話したりするのが好きである学生の割合は(やはり)低いことも分かった。

「好き」にさえなれば、向上のために「自ら努力できるのでは」と思うところなのだが、現実問題、学生たちの英語に対する気持ちを変えるのは難しい。ただ、「好き」か「嫌い」かの感情は置いておいても、授業の中で実質的にできるだけ多く「英語を使える」機会を作ってやることであれば、明日からでも、即、実行可能なことではないだろうか。「機会」を与えてやれば、学生たちも、少しずつであったとしても、英語を使い始めるのではないだろうか。

今回の「取り組み」の結果より、そのような機会を少しでも作ってやることで、学生たちの英語にまつわる実態(英語を話す機会が増える等の)に変化をもたらすことが可能となることが明らかとなった。

今後も、授業の中で、学生たちが「英語を使う」機会を更に増やししながら、学生たちが苦もなく「英語を使う」ことができるような方向へと導いていってやれたらと思う。また、学生たちの意見も取り入れ一緒に授業を作っていくながら、学生たちが授業の中で、ますます「英語を使える」ような、他の手段の可能性等をも模索していきたい。

参考文献

- 協同学習法ワークショップ<Basic> 2009年改訂版 日本協同教育学会.
- 堀内ちとせ(2013)「英語の日常化を図るために―「英語活動・実体験レポート」の試みについて―」*Language & Literature (Japan)* 第22号 82-94. 愛知淑徳大学大学院英文学会.
- _____(2014)「英語の瞬発力を上げるために」*Language & Literature (Japan)* 第23号 14-21. 愛知淑徳大学大学院英文学会.
- _____(2015)「コミュニケーションを促すために―ちゃぶ台の導入について―」*Language & Literature (Japan)* 第24号 43-53. 愛知淑徳大学大学院英文学会.
- 安永悟(2012)『活動性を高める授業づくり―協同学習のすすめ―』医学書院.

参考資料

資料1

分析 **a**_____

生体サンプル **b**_____ **s**_____

免疫学 **i**_____

微生物学 **m**_____

化学 **c**_____

血液バンク **b**_____ **b**_____

正確さ **a**_____

献身 **d**_____

分析的な **a**_____

科学的な **s**_____

資料2

分析 **analysis**

生体サンプル **b**_____ **s**_____

免疫学 **i**_____

微生物学 **m**_____

化学 **c**_____

血液バンク **b**_____ **b**_____

正確さ **a**_____

献身 **d**_____

分析的な **a**_____

科学的な **s**_____

資料3 うちわちゃんマニュアル(表)

★授業の始めに… (チャイムが鳴ったら…)

☆体調確認→How are you? 😊 /

I'm fine! / I'm good! / Not bad. / I'm OK. / I'm not OK. / I feel terrible ...

☆今日も頑張ろうね! →Let's enjoy English together (again) today! 😊

★いないメンバー確認→「授業の紙」に明記

→Is Everybody here? →○ちゃんいません…(○ちゃん is not here now...)

→○ちゃん来ました!(○ちゃん is here now!)

★返却された「授業の紙」・「英語活動」を確認 (★注意書き★があることがあります)

→Everybody, have you finished checking the comments? 😊 / Done! 😊

①「英語活動」を鑑賞し合う (Myペンでカラフルに!)

→Everybody, do you have your journal? 😊 / Sure! 😊

(Myカラーを決める→What color do you have? 😊 / Do you remember your color? 😊)

(忘れたメンバーには…「授業の紙」の指定場所に記述→Can you write your goal here? 😊)

(英語活動を集める→Everybody, give me your journal! 😊 / Sure! 😊)

Everybody, let's pass around the journal this way! 😊 / Yes, let's! 😊 / Sure! 😊

Can you check my journal (our journals)? 😊 / Sure! 😊

Let's find most impressive part! 😊 / Yes, let's! 😊 / Sure! 😊

Let's write at least one positive comment! 😊 / Yes, let's! / Sure! 😊

Thank you (for your journal)! 😊 / Thank you (for your comments)! 😊

②「英語目標・活動目標」を声かけ (それぞれ違ってOK)

→Everybody, let's set today's English goal! 😊 / Yes, let's! 😊 / Sure! 😊

Everybody, have you set the today's activity goal, too? 😊 / Done! 😊

Is everybody finished? 😊 / (We're) finished! 😊 / Not yet...I'm going to finish it up! 😊

③「英語的な発見(授業の紙の右下)」ボックスを声かけ

→Everybody, this box is very important! 😊

Everybody, let's find out at least one thing during this class! 😊/Yes, let's! / Sure! 😊

→①～③が終わり次第

★★「バイリンガルシート」・「よせ書き」を回し始める(隙間時間に、でOK)★★

→Everybody, let's start the bilingual sheet (activity)! 😊

★授業の途中に…

★メンバーに声かけ

→○ちゃん, are you OK? / Are you cold? / Is everything OK? →何かあったら、うちわ!

→Everybody, how was it? Was it difficult/easy? 😊

→Everybody, how many did you catch? 😊/Do you have your textbook/ dictionary? 😊/ Sure! 😊

→Is everybody ready? 😊/ Is everybody finished? 😊/ Is everybody OK? 😊

→Everybody, let's share together! 😊 →「授業の紙」を「せ～の (Ready? Go!)」で見せ合う 😊

資料4 うちわちゃんマニュアル(裏)

★「バイリンガル・シート」/「よせ書き」/連想ゲームで「授業の紙」をチーム内で回す(隙間時間に、で OK)

→○ちゃん, here (you are)! 😊 / Thank you, ○ちゃん! 😊

→○ちゃん, can you pass around this (sheet)? 😊 / Sure! 😊

★「よせ書き」を次のチームに回す(隙間時間に、で OK)

→(「よせ書き」を持って)Is everybody finished? 😊 / (We're) finished! 😊

→Team ○/○ちゃん, here (you are)! 😊 / Thank you! 😊

Can you pass around this (sheet)? 😊 / Sure! 😊

☆メンバーへの励まし

→We're almost there! ~ more minutes! We can do it! Hang in there! 😊 / Thank you! I'll try! 😊

★授業の終わりに…

④「英語目標・活動目標」の「振り返り」・「自己評価」についての声かけ

→Everybody, let's look back on today's activity! 😊 / Yes, let's! 😊 / Sure! 😊

→Is your reflection comments finished/done? 😊 / (It's) finished/done! 😊

→Is your self-rating finished/done? 😊 / (It's) finished/done! 😊

Not yet ... I'm going to finish it up quickly! 😊

⑤「英語的な発見」の確認

→Everybody, is this important box finished/done? 😊 / (It's) finished/done! 😊

☆チームで「授業の紙」を最後に共有する★時間に余裕があったら是非★

→Everybody, let's share together! 😊 / Yes, let's! 😊 / Sure! 😊

→「授業の紙」を「せ～の (Ready? Go!)」で見せ合う 😊

★集める

→Everybody, give me your paper! 😊 / Sure! Thank you! 😊

→Everybody, give me your journal! 😊 / Sure! Thank you! 😊

→Everybody, give me the bilingual sheet! 😊 / Sure! Thank you! 😊

→チームの「授業の紙」を一気に(全員分まとめて)「外表」に半分折る

→中に「英語活動の紙」&「バイリンガル・シート」をはさみ、提出物ファイルに入れる

→うちわを「うちわちゃん・マニュアル」ファイルに入れる

☆おつかれ! →We enjoyed English (again) today, right? 😊 / Right! 😊

Have a nice day! / You, too! 😊 / See you next time! 😊 / See you on ~day! 😊

→「うちわファイル」(ディスプレイ下)と「提出物のファイル」(茶色の台の上)を提出する

♥Thank you for your cooperation!♥